

「代官田口五郎左衛門様御支配所、常州・野州村々より心学道話願い出候に付き……来る丑年正月四日出立にて罷り越し候様仕り度く、尤も二月中には帰府仕るべく候。尤も留守中、御役所御会日は、門弟田島有寛差出し候様仕り度く、此の段御聞濟下され候様願上げ奉候、以上

文政十一子年十一月

大島有隣

寄場御役所 御元々中様

これを要するに、人足寄場や心学堂のあった上郷の陣屋は真岡代官の支配地で、文政元年には、代官の要請によつて、大島有隣が村々を巡講し、上郷を訪れて寄場人足について和歌を詠じている。時の代官竹垣直清は心学の修行をした人で、文政四年にも有隣を招いて巡講させた。また、直清の父も心学の理解者で、寛政十二年、植松自謙と北条玄養とを招聘して支配地を廻らせている。さらに、直清の後任者田口五郎左衛門も、文政十二年に、大島有隣をして支配下の村々を巡講させた。このように、心学者が真岡代官支配の村々をたびたび巡講しているから、その都度、上郷へも立寄つて、人足寄場で道話をしたであろうと推定される。しかし、それを実証する資料はいまのところまだ見当らない。大方の御教示を得ることができれば幸甚である。

(1) 原胤昭著『免囚保護事業』五〇―一二頁

(2) 石川謙旧蔵「石門心学史研究資料」関東地方、七二七の三

(3) 石川謙著『石門心学史の研究』四七九頁、四八一頁、一一七六頁

(4) 同前一一三四頁

(5) 同前五七七頁

(6) 「寄場人足え心学教諭道話之儀に付申上並大島先生御出席に付書被置候一件」(石川謙旧蔵、石門心学史研究資料、関東之部) 第六号文

「安政奇聞佃夜嵐」と人足寄場

山本二郎

歌舞伎で牢獄の場面を写實的に描いたものは、「四千両小判梅葉」と「安政奇聞佃夜嵐」との二つしかない。しかも二作とも明治以後の作品である。

江戸時代の浄瑠璃や歌舞伎では、武家社会の事件を脚色上演することが禁じられていたため、やむなく時代をさかのぼらせ、あるいは人名や地名をかえて脚色するという慣習が生まれ、それは明治期を迎えるまで変らなかつた。牢獄を描いても、景清の牢破りのような古風な牢は別として、牢内を写實的に舞台に再現することとは、江戸時代ではやはりタブーであつたようだ。

「四千両」は明治十八年十一月千歳座で、「安政奇聞」は明治に作られ、大正三年六月市村座で初演された作である。「四千両」は安政期の江戸城内御金蔵破りの事件を河竹黙阿弥が脚色したもので、その牢内の場が、牢内の習慣やことばを写實的に描いたことが珍しく、大当りをとつた。これには田村成義が深いかかわりをもっており、町奉行の日記を調べたり、前科者を集めて牢内の様子を菊五郎に教えさせるなど、影の力となって働いた。その田村はまた「安政奇聞」でも隠れた力をつくしている。

「安政奇聞佃夜嵐」の作者はふつう古河新水といわれている。ところがこれが大正三年に上演されたとき、六代目尾上菊五郎が芸談を発表しているが、その中で、

「『安政奇聞佃夜嵐』は明治二十五年に新富座が深野座と改った時、亡父と先代の左団次さんとで演るために黙阿弥翁が筆を執った狂言で、その時は『新舞台安政奇聞』といったのです。ところが、少し事情があつて、中止になつたまゝ今日まで上場されなかつたのです。翁の作でイタにかゝらずにあつた狂言はこれ一つで、今度二十何年目か始めて上場されたわけです。」（『演芸画報』大正三・一〇）

と重要な発言をしている。

古河新水というのは十二代目守田勘弥のことで、明治劇壇を牛耳った興行者であるが、劇界の知識人で、明治十年代に演劇改良の運動が起って以来、時代の風潮について黙阿弥にいろいろ作劇上の助言もしている。のち十九年に黙阿弥の弟子格となって新水と名のり、「三府五港写幻灯」「名大島功なにおしまのゆんざい誉弓勢」などを書いている。新水は立案したものは必ず黙阿弥と相談し、その注意をうけてから書いたというから、この作も黙阿弥の趣向がかなり入っていると考えて間違いないだろう。六代目菊五郎が黙阿弥作と断定しているのも、その辺の事情を伝えたものと思われる。

そのふたりのほかにさきの田村成義の存在を忘れることはできない。この作の材料は「四千両」と同様に田村から出ている気配が濃い。

黙阿弥の後嗣河竹繁俊氏は「この作は時事を題材にして新水氏が案を立て、田村翁がこれに智慧を貸し、又寄場の生活其他の考証に任じ、黙阿弥もこれに参与して、眼目の場も幾場か執筆し、新水氏及び三世河竹、竹柴其水、久保田彦作（竹柴幸次）等も助筆したものであらう」（「歌舞伎」大正一五・六）と推定している。

ここで田村成義の経歴をふりかえってみよう。彼は嘉永四年に日本橋の眼医者のの長男に生まれたが、慶応元年十五歳のとき父が没し、同じ年に同心鍵役筆頭の田村金太郎の養嗣となり、囚獄書役の見習に出、のち囚人前科取調役となった。明治三年に辞職、のち法律学校に学んで、十年に代言人（弁護士）となった。このとき五六十人の受験者の中で一番だったという。長谷川時雨が「父母追懷」の中で、女史の父が「田村さんは日本最初の代言人十二人の内の一人で、遠山の金さんのように巻舌のベランメーであった」と語ったことを記している。

そして十二年、久松座の訴訟事件で守田勘弥との間を調停したのが契機となって勘弥と懇意となり、やがて新富座の顧問をつとめるようになり、さらに五代目菊五郎の相談役にもなって、劇界との関係が深まってきた。

ところが十八年に役もめがもとで、菊五郎は勘弥と不仲になり新富座をはなれて千歳座に移ったが、その時田村は菊五郎と行動を共にした。そして新富座の団十郎・左団次・宗十郎らの大一座に、菊五郎だけの無人の一座で対抗して、前述の「四千両」を出して連日満員の大当りをとった。これが興行界に關係する第一歩で、のちに歌舞伎座の全権をにぎり、また市村座を経営して菊・吉らを擁していわゆる市村座時代を作るなど、興行師としてすぐれた業績をのこしている。

*

明治二十五年新富座が深野座と改めて再出発するに際し、勘弥・田村・黙阿弥の三者が智慧を集めて作った「安政奇聞」が、さきの六代目菊五郎の芸談で「少し事情があつて中止になった」というのは、次のような理由からである。勘弥はまず菊五郎に交渉し、つぎに座頭の左団次へ話をもつてゆくと、左団次はこれを断った。左団次はかねてから勘弥には深い恩誼を感じており、いつも協力的だったのに、なぜこのような態度をみせたかという、そのうらに左団次が勘弥から離れてゆくいくつかの原因があった。

左団次が勘弥の借金の保証人になったため債権者から強制執行をうけて、余儀なく五千余円の大金を支払わざれたこと、また八月の巡業のとき菊五郎の弟子の松助が左団次一座に入ったため、菊五郎と左団次との間に感情のもつれができたところへ、秋興行の打合せに仙台の菊五郎を勘弥と田村とが訪れ、また帰京した菊五郎を丁重に出迎えたのに、左団次に対しては、平生の心易さから打合せも出迎えも疎略にしたため、左団次の感情を害したことなどである。そんなことでこのときの上演が流れ、二十二年目に田村が座主になっていた市村座で陽の目を見ることになったのである。

*

この芝居のもとになったのは、明治十七年三月に石川島監獄で服役中の政治犯松田克之と赤井景韶とが脱獄し、金に困って車夫を殺し、松田は翌日、赤井は半年のち捕えられて処刑されたという、当時世間をさわがせた事件である。その実説については半狂堂主人（宮武外骨）の『赤井景韶伝』にくわしいので、それにもとづいて簡単に紹介しておこう。この書は「自由灯」という日刊新聞の明治十八年四月七日から二十八日まで連載された「檻の春雨」のほか、判決文などを収録したものである。

松田克之は石川島の士族で、大久保利道暗殺事件の連累者として終身徴役、赤井景韶は新潟県士族で自由党壮士、政府の大臣連を暗殺する目的で天誅党というものを組織しようとして、趣意書を作ったのが露われて重禁獄九年の刑に処せられ、ともに石川島監獄につながれていた。ところが松田が脱獄を計画して赤井を誘い、十七年三月二十六日の夜に看守のすきを見て脱け出し、干潮に乗じて佃島にわたり、小舟で対岸の築地明石町に逃げた。そして路金調達のため、通りかかった二人のり的人力車に乗って、本郷に止宿している赤井の弟新村金十郎を訪ねたが、金四十銭を得たのみ。車夫を生かしておいては発覚のおそれがあることを懸念し、車夫を欺いて千住にいたり、車夫を殴殺して引返し、京橋に住む獄中の知合い井上敬二郎（『近事評論』の編集人で二年の刑に処せられた）を訪ねて金三円を借り、これを分配して別れ別れになった。松田はその夜下板橋の宿で捕われたが、赤井は山梨県へのがれ南都留郡宝村の曹洞宗の広教寺に剃髪してひそんでいた。八月そこを辞して静岡県へ行き、島田で滞留したのち浜松へゆく途中、大井川橋畔で探索中の警察官のため捕縛された。そして両名は車夫殺しの罪で死刑を宣告され、大審院へ上告したが棄却され、十八年七月二十六日刑を執行されてその生を閉じた。

*

以上の実説をふまえて六幕十五場の芝居に脚色された。時代は安政年間、石川島監獄は佃島の人足寄場におきかえられている。大正三年九月市村座初演の台本は残っていないが、絵本筋書や「芝居見たまゝ」などによって、その構成を紹介してみよう。

序幕は深川成田山開帳の場と佃島寄場飯焚所の場。深川の場は巾着切りの男をかせに、青木貞次郎と神谷玄蔵とが佃島の寄場で苦役していること、上州屋の五兵衛が深川の仮宅通いに浮身をやつし、甲子楼の羽衣に夢中になっていることなど、後段の筋を売るだけの場である。佃島の場は、生涯二人は娑婆へ出られないことを仲間の噂話で知った神谷が、青木をそそのかして島ぬけの相談をするくだりで、この文章の眼目となる場面だからあとで詳述したい。

二幕目は深川仮宅甲子屋の場、佃島寄場構外の場、深川山本町の場、深川油堀一の橋の場、本所御船蔵飯屋の場からなる。甲子屋で五兵衛が羽衣をあげて酒宴、遣手らが羽衣の情人の尾張屋手代幸七の悪口をついていると、通りかかった幸七が座敷にとびこみ、五兵衛との意地張りになって主家の金の封を切る。佃島構外では青木・神谷が島抜けをし、深川山本町で二人は上州屋の伴半次郎から二百両奪うが、様子を窺っていた駕籠屋に酒手をゆすられこれを殺す。一の橋では金をとられた半次郎が身投げしようとするのを幸七が助け、遣い残りの二百両をむりに受取らせ、自分が川に身を投げる。飯屋で夜をあかした青木と神谷は行末を話し合う。

三幕目は根岸甲子屋別荘の場、同土蔵内羽衣責の場、鎌倉河岸上州屋の場。甲子屋の主人文四郎の情のこもった説得に、羽衣は五兵衛に身請けされることを承知するが、そのあと書置の文を五兵衛に送る。五兵衛は文を見

て驚き、半次郎にいさめられて迷いの夢がさめる。

四幕目は甲州連華寺庫裏の場、同一里塚出会の場。神谷から教えられて父の敵の山田を求めて甲州へ来て、いまは連華寺の所化西心となつてゐる青木は、江戸帰りの男の話から、敵が実は神谷であったことを知り、その神谷によく似た男が近くにいることを聞かされる。青木は人目を忍ぶため百姓家に奉公している神谷を尋ねあて、彼を責めるが、神谷はしらを切る。二人は短刀をぬいて争うが、やがて捕手にかこまれて捕えられる。

五幕目は高崎駅上州屋の場、奥座敷再会の場。上州屋の店先で施行の餅をくばつてゐるところへ、身投げして死んだと思われた幸七が現われて半次郎と再会、五兵衛は幸七に詫び、幸七が遣つた金を御礼にさし出す。

大詰は伝馬町牢屋敷の場。青木と神谷は死罪を申し渡され、青木は親の敵を前にして共に死罪に処せられるのを口惜しがる。役人は「青木は親の敵の神谷の首を一目見た上で処刑をうけよ」と申し渡す。

この時の配役は、青木・幸七（菊五郎）、神谷（吉右衛門）、五兵衛（東蔵）、半次郎（勘弥）、文四郎・巾着切清次（三津五郎）、羽衣（美雀）らであった。

その後大正十五年六月歌舞伎座の二番目狂言として再演されたときは、幸七・羽衣のくだりは省略して青木・神谷の本筋だけにしたので、すっかりしてわかりやすくなった。序幕が佃島寄場飯焚所の場、返しが佃島寄場構外の場、二幕目が深川南部河岸の場、返しが御船蔵前飯屋の場、三幕目が甲府在連華寺の場、返しが同一里塚三又の場、大詰が伝馬町牢屋敷の場という場割であった。なおこの時の台本（松竹大谷図書館蔵）には、人名の青木貞次郎が赤井敬次郎、神谷玄蔵が松田秀太郎というように、実名に似かよつた名前になっているが、実際の上演では初演どおりの青木、神谷でやっている。

その後には昭和七年四月の東劇で、伝馬町牢屋敷をばういた三幕のかたちで上演され、さらに戦後の昭和二十

三年五月の東劇では、前半の佃島から居酒屋までに捕縛の場を加えた二幕物が、同じ菊五郎、吉右衛門によって演じられた。こうして菊吉によって前後四回も上演されているのは、ふたりのちがつた芸風のかみ合わせが面白い舞台を作りあげたことを物語るものであろう。

この作は前半の居酒屋の場までは面白いが、後半の甲州に舞台が移つてからは筋を運ぶだけのものになつてしまふので、当時の松竹の大谷竹次郎会長から「後半を何とか面白く書替える工夫はないか」といわれていた巖谷楨一氏が、のちに後半を書直して「新釈安政奇聞佃夜嵐」を作り、昭和四十八年四月の歌舞伎座で、尾上松緑の青木、中村勘三郎の神谷で五度目の脚光をあびた。

この改訂にあたって巖谷氏はステイブ・マッキン主演の「ネバタ・スミス」からヒントを得たといつてゐる。西部の金鉱で両親を殺された主人公が脱獄して親の敵を討つという話を後半にはめ、「笛吹川畔義兵衛住居」と大詰「信玄金鉱外」とを創作した。

「武田信玄」一家が滅亡する時、軍資金を隠匿したフィクションを背骨にしたのは「ネバタ・スミス」から生まれて来た智慧で、これによって「佃夜嵐」の原作に厚味を付け、青木と神谷の浪人を水戸の攘夷党に加わるため軍資金調達の政治的色彩を加えたのも、実は近頃の赤軍派の行動等に教えられるところがあったからである。所謂三の切に当る「甲州笛吹川義兵衛住居」の場は、昭和十二、三年の頃、私が雑誌「現代」に掲載した「四千両事件」の一幕を、うまくはめ込んだのである。（「安政奇聞佃夜嵐に就いて」歌舞伎座筋書）

*

さて肝心の佃島寄場飯焚所の場に引きかえそう。さっきいったように幸い再演の時の台本が残っているので、

それによって舞台の説明をすすめてゆこう。なお巖谷氏の『新釈安政奇聞佃夜嵐』（季刊「歌舞伎」第十九号所載）のこの場面は、せりふに若干の増減があるだけでほとんど原作を踏襲している。

幕があくと、舞台は「正面、柵矢來の中を見せたる板羽目。上手、荒い格子の仕事場の入口。この前に松新沢山積んであり、続いて釣瓶井戸。能き所に高さ四尺、巾二間の石の竈、是へ播磨鍋を四つかけ、下手、格子付きの仕事場の出入口」といった装置で、ここに水玉のお仕着せ、三尺帯を結び、素足、藁草履という扮装の寄場人足七八人が、モッソウ飯をこしらえている。

ひとりが「今日は米のときがいいのでこの部屋でも喜ぶだろう」というと、他の者が「そうよ、はいり立ての頃はモッソウ飯のにおいをおくど咽喉へ通らなかつた」と応じ、つづいて仕事の話になる（以下の引用では、混乱をさけるため、赤井は青木、松田は神谷に改めた）。

勝蔵 俺は初めては入ったが、房事の手伝ひになる迄、麦搗きに廻されて実にこり／＼した。

三次 それ所か、俺なんざア油締めに戻されて、あんな苦しい事はなかつた。夫から見ると麦搗きの方が余つ程楽だ。

長次 おらアおかげで綿打ちへ廻ったが、それでも随分苦しかった。なんでも藁細工が一番楽だ。

熊次 違へね。その藁細工に廻つてゐた青木と神谷は大仕合せだ。青木は世話役格になり、神谷の兄いは房事に廻り、二人とも運がいゝな。

太郎 青木とか神谷とか苗字のついてゐるからな、何れこちとらとは身分が違ふのだらうが、二人共えらく巾を利かす人だ。

仙吉 そりやアその筈よ。俺達とは身分が違ひ、青木はお徒士^か、神谷は小普請、とも角も御家人だ。

こうして二人のことが噂の種になり、「われわれは送られる時何年というきまりはないが、それでも長くても三年三月立てば出られる身体、だが二人は生涯出られないということだ」「なんだか大きな事を目論んで、お上のためにならねえから、一生ここを出さねえというお奉行様の腹だそうだ」などと話し合う。そこへ房事（炊事係）の平五郎が出て、皆に早く仕事をしろと追払い、同僚の神谷がさす股をもって現われるので、平五郎はしつががゆいから湯に入つて来ようといつて退場する。入浴は隔日にあつたというが、衛生状態はわるく皮膚病が蔓延していたことがうかがわれる。

やがて寄場奉行の見廻りがある。ト書には「奉行横山先に、元締宇野与兵衛、下役川村八三郎、三好三次郎、羽織、着流し、大小、雪駄にて出て、直ぐに舞台に来る」とある。先達ての歌舞伎座の舞台では、奉行は羽織袴に陣笠姿で現われた。滝川政次郎博士は観劇記（人足寄場顕彰会々報第三号）でそれが史実に反していることを指摘されている。寄場奉行は奉行といつても地位は低く、役高二百俵、二十人扶持で、陣笠などは將軍お成りのお伴をするとき以外は冠らないといい、さらに幕末に寄場見廻り役をつとめた原胤昭氏によって記された服装が紹介されている。その一部に「服装は白衣と称へ、即ち着流しなり。羽織は黒の紋附を用ひ、其地合は羽二重、綾織、夏は紗の類なり。着物は無地又は縞もの、綾織の類にして、紺足袋、角帯、太打紐の帶止めを結び、大小の刀を門差しに手挟む。夏は一文字形の菅笠、綱代笠、又は細竹編みの笠を冠り、雪駄を穿く。」とある。

さて下役が「お見廻り」と声をかけるので、世話役の青木が出てひかえる。元締が「変ることはないか」と聞き、青木が応答する。このあたりについて菊五郎の芸談がある。

「役人が見廻りに来て、最初「変る事はないか」と聞きます。と俺^{わし}の貞次郎が「お有難うございます」といひます。役人が又「申上ることはないか」といひます。さアこれから厄介なのです。「平日お表お役人衆

中様お手当宜しく、お食事お煎湯^{せんとう}に至るまで行届きまして一同有難う存じます」ってんですがね。此の台詞は大ベランメーで、澀まず支えスラ／＼といはなきやアならないので、エー／＼なんて愚図々々しやうものならそれこそ事壊しです。此の文句は遊人の「お控えなすっておくんせエまし」って、アレね、アノ調子で、トン／＼トン／＼と巧くいへないと巾が利かないので、もし支えたりなんぞして愚図ついてゐやうものなら、皆んなに甘がられて了うのださうです」(「演芸画報」、大正三、一〇)

そしてここで役人の前に跪いて手を下げるところは、地面まで下げてはいけないそうで、膝小僧の少し上のところとめていっているといっている。田村成義あたりの注意に従ったのであろうか。

そのあと青木は神谷から、二人とも生涯娑婆へ出られぬらしいと聞かされ、さらに親の敵は山田三十郎という者だと教えられ、敵討ちのためにも島を抜きたいという気をおこす。もともと青木の親を殺している神谷は自分が抜け出したいため青木をそのかす。この島抜けの相談をするところが序幕の見せ場で、神谷のことばを聞いているうち、次第に気が変つてゆくのが演どころになる。

神谷は「お前は親の敵を討たにやアならねえ身分、その本望も遂げねえで爰で死んじやア不孝の上塗り」と気をもたせるように説くので、青木はだんだんその気になってゆく。すると深川の方から仮宅^{かりたく}(吉原が焼失したときの臨時営業の遊里)で騒ぐざわめきが風にのって聞えてくる。

神谷 雨気^けで東風^{こち}に變つたせい、近く聞へる仮宅の、面白さうなアノ騒ぎ、どこの奴だか羨ましい。娑婆へ出れば遊べもするし、第一おめへは敵も討てるが、生涯爰で終るのは無くやしい事だらうなア。

ト氣を持たせる。青木は思案をして、

青木 オイ神谷、假令親身の兄弟でも、云へねへ事だがおめへだから、臍腑を割って相談するが、モシ氣に

入らざア止めるから、必ず人に云つてくれるな。

神谷 どんな話か知らねへが、何で人に云ふものか。さうして俺に相談とは。

青木 その相談はかういう訳だ。

ト囁く。神谷態と惻りして、

神谷 そんならこゝを、

青木 オイ。

ト制す。

神谷は青木より役者が一枚上の悪党である。青木を口車にのせて島抜けをし、のちに青木から親の敵と問いつめられても、あくまでシラを切り通そうとする図太い人物である。初演のとき初日の舞台を見た久保田万太郎は、神谷役の吉右衛門の演技について、青木を誘惑する心もちが見えず、親身に相談をもちかけているようだとの意を表している。

島抜けの相談がまとまってからつぎのようなせりふを取りかわす。

神谷 おめへはお徒士で水の中は平氣だが、俺あ徳利の声色だから、こいつには恐れ入る。

青木 川の中は俺の方に趣向があるから、案じねへがい。

これは滝川博士の指摘(先述の観劇記)のように、直参の徒士衆は、平生は獅子の間などに詰めて雑用をつとめ、將軍お成りのときには先払いや先固めを行ったが、八代將軍吉宗のとき以来、夏には毎年隅田川で水泳の訓練をさせられたので、徒士衆はみな水泳ができたという。そういう史実がこのせりふのうらにひそんでいる。

そしてその夜更けに二人は島を抜け出すのであるが、この場面にはせりふが全然ない。台本には次のように書

かれています。

「本舞台上手の大臣柱より画心に高二重の石垣の蹴込み。この上に柵矢来、石垣の前には浪除けの杭。正面より下手一面の浪の中遠見。舞台、花道とも一面の浪布。総て佃島寄場構外、夜の体。浪の音にて道具止る。ト本釣鐘凄き合方になり、青木貞次郎、柿無地のお仕着せにて、着物、股引、足袋、草履を小倉の帯にて結びしを抱へ、中より昇ったる心にて出て、帯を力に下へおりる。続いて神谷、さす股を持っており、兩人ホツと思入。四方を窺ひ青木は衣類を神谷に渡し、囁く事あって海へはひり、舟を盗んで来やうという思入にて身支度をする。神谷は帯をさす股にて取らうとする。青木は浪の中に半身入れる。この模様、凄き合方にて、道具廻る」

とある。台本では海に身を入れると舞台が廻ることになっているが、実際はここで観客をわかせる演技を見せた。もう一度菊五郎のことを借りよう。

「かねて抜け出す時の用意にドメておいた新入の着服ドバを小さくまとめた奴を、帯でボンの窪のところへ結びつけます。頭へ結びつける方が本当だという方もあったのですが、何だか狐に魅された見たいで三枚目に成りますからそれは御免蒙りました。それでソロ／＼と水の中へ入り、杭へ斯う手をかけてチョイと見得をするのが道具替りで廻り道具になりますが、廻って行く間デツとしてゐるのも間が抜けますから水の中を漕いで歩く心持ちで、身体を動かしてゐます。然う演ずると不思議に御見物が喜ぶのですが、……ふだん水の中を歩く時の形なんぞ気をつけて覚えておいたものですから、それを応用して写真にやって見たのです。」

初演では青木だけが海に入って、神谷は片足をこわごわおろすところで幕になったが、再演の時は青木が神谷を負うて泳ぐところを見せ、大いに観客をわかせたという。

再演の舞台を見た伊原青々園は、

「島破りの場では菊五郎が器用な業を見せた。高塀を乗越える手順や足どりがうまい。それに浪布の間を歩くのが、どうしても川の流れを行く人にか見えな。吉右衛門は此処でオヂけた態度を見せたり、間の抜けた風をしたりして、見物は悦ぶが、役の性根はこれがために矛盾する。脚本に其う指定してあるなら作が悪いのである。優が愛嬌を売るつもりで其うするなら優が悪いのである。」

と批評し、また岡鬼太郎は「菊五郎の青木は芝居と写真とを巧みに融合させて、斯う云ふ役にかけては、確に世界の第一人者である」と最大級の讃辭を呈している。

大話の伝馬町牢屋敷の場で、役人がふたりに処刑をいい渡すところは牢内の実情がうかがわれて面白いが、これは「四千両」をかなり粉本にしている。ふたりは悪党ぶりを発揮し最後まで争い、恨みをのこして死んでゆくことになる。神谷が「私の首を青木に一目見せたいので先にお仕置きを」と役人に願えば、青木もまた「卑怯者の神谷に見せてやるため私を先に」といい争い、結局役人は「親の敵とあるからは、青木は神谷の首級を見届けた上でお仕置きをうけるがよい」といい渡す。幕切は神谷が刑場へ引かれることになって、

神谷 それじゃア青木。

青木 神谷。

ト顔合せる。双方見合つて木の頭かしら。

兩人 屹度忘れるな。

と、双方恨みをこめてにらみ合っている形で幕が下りるのである。

このとき青木ら囚人の扮装は、重ね附きの着附、帯、藁草履で荒縄に掛っているのだが、菊五郎は紙で作った

珠数を使ったという。これについては因縁話があり、田村成義の父金太郎が鍵役筆頭をつとめていた当時、死罪を覚悟して紙で珠数を作っていた囚人が特赦で釈放されるにあたって、親切にされたお礼にと差出したのを快くうけた。のちに成義が養父から譲られたのを、何かの参考にと五代目菊五郎に贈った。大小二聯あって、大きい方は五代目菊五郎が「四千両」のときに用い、小さい方は「安政奇聞」の書卸しするとき使う筈だったが、中止になってそのままとなっていたのを、今度六代目菊五郎が青木を演ずるのに使ったのだという。

以上いろいろのべてきたように、この芝居は菊五郎と吉右衛門との芸で高い評判を維持してきたが、脚本としては必ずしもすぐれているとはいえない。前半は面白くできているが、後半の芝居運びはあまり上出来ではない。その頃有名な劇評家だった竹の屋主人（饗庭篁村）は「菊五郎の青木貞次郎、吉右衛門の神谷玄蔵といふ悪党が佃島の寄場を破って逃げて、甲州で一途に捕まり、伝馬町の牢内でまた一途に仕置に遭ふ。其の兩人の一人は敵、一人は敵と狙ふ者で、共に刑場の露となる。此の結末が奇聞たるところで幾分の意味もあれど、余はたゞ佃島の寄場の有様や伝馬町牢内の実地を見せるといふだけにて筋としては奇にもあらず。……しかも神谷が青木の父を討った意趣も、また兩人が共謀した悪事の次第も不明なるは箸の通らぬ煮加減なり。」と難じ、青々園は再演を批評した文章の中で「とにかく、菊五郎と吉右衛門との芸によって、劣った此の脚本が面白く仕活かされた」とはつきり記しており、脚本の価値はあまりみとめていない。

しかし佃島の人足寄場を芝居の背景に使ったのは、当時とすれば一つの冒険であり、一つの見識でもあったと思う。この作品で扱われていなければ、一般の民衆からは全く忘れられてしまったであろう人足寄場の存在が、今日改めて認識されるよすがとなっている点では少なからぬ意義があると思われる。もって作者は瞑すべきであろう。

ろう。

なお人足寄場を扱った歌舞伎狂言は外にはない。江戸時代の草双紙類にも見当らないようである。戦後になると滝川博士の長谷川平蔵の研究がひとつの契機になったかと思われるが、人足寄場を題材にしたものがいろいろ現われてきた。これを肯定的にあつかっている山本周五郎の「さぶ」、否定的にあつかっている松本清張の「海瀟」、また長谷川平蔵を主人公にした池波正太郎の「鬼平犯科帳」などの小説がそれである。ほかにもテレビで時々人足寄場から出てきた人物が登場することがあるが、それらについて詳述する余裕をもたない。他の機会をまつことにしたい。またこの稿をまとめるに当たって滝川博士より「赤井景韶伝」や「安政奇聞」の台本コピーなどを拝借し、いろいろ御教示いただいたことを心から謝する次第である。